様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：１４３０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２２５４

研究課題名（和文）1900-80年日本近代精神史における時間表象

研究課題名（英文）The representation of time in Japanese modern intellectual history 1900-1980

研究代表者
伊藤　徹（ITO, TORU）

京都工芸繊維大学・基盤科学系・教授

研究者番号：２０１９３５００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：時間は、人間の生と経験がそこで営まれる場所として、知全般の根源的な次元であるが、それゆえにこそまた、これを対象化することはできないのであり、したがって私たちはこれに接近するに、イメージをもってする。本研究の目的は、日本の近代化過程、とくに1900-1980年に現われた時間のイメージを探索することにある。扱われた思想家、芸術家は、夏目漱石、柳宗悦、小津安二郎、寺山修司、是枝裕和など。主要業績としては2020年に堀之内出版から出された代表者の単著『《時間》のかたち』が挙げられる。また代表者が編者の一人となった論文集『寺山修司の遺産・21世紀のいま読み直す』もまもなく同出版社から出る予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
時間は知のもっとも根源的な層をなすものとして優れて哲学的課題であるが、本研究は通常の哲学研究でなされる、いわゆる哲学者の時間論的テキストについての検討ではなく、哲学学界外部の人々にも受容層をもつ文学者、工芸指導者、演劇人、映画監督などの言説や作品を扱ったところに特色がある。このことは、哲学という知の技法を専門外の人たちに伝えるとともに、この知自体を衒学的な拘束から解き放って活性化することに寄与するはずである。

研究成果の概要（英文）：Time is the fundamental dimension of general knowledge, in which we live and make experience. Unable to be objectified however, we approach it with fantasy or images. The aim of this study is to explore the image of time as it appeared during Japan's modernization process, particularly between 1900-1980. Intellectuals and artists covered include Natsume Soseki, Yanagi Muneyoshi, Ozu Yasujiro, Terayama Shuji, Kore-eda Hirokazu etc..
Among the author's main achievement is the book "The Images of Time" published by Horinouchi Publishing in 2020. A collection of essays, "The Legacy of Shuji Terayama," for which he is one of the editors, is scheduled to be released soon by the same publisher.

研究分野：哲学

キーワード：時間　表象　虚構　近代化　文学　演劇　映画　工芸

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

代表者は、日本近代精神史に関する共同研究を、以下のかたちで主催してきた;2006-07 年サントリー文化財団・人文科学、社会科学に関する研究助成「1910－30 年代日本における《作ること》の諸相とその精神史的意味」、2007 年度基盤研究(B)「作ることの視点における 1910-40 年代日本近代化過程の思想史的研究」(19320019)、2009 年度基盤研究(B)「1890‐1950 年代日本における《語り》についての学際的研究」(21320021)、2012 年度基盤研究(B)「《主体性》概念を基軸とした日本近代化過程における《自己》造形に関する学際的研究」(24320023)。一連の研究はいずれも、西洋の圧倒的な影響下で科学技術化を推し進めた日本近代を思想史的もしくは精神史的に考察するものであったが、代表者として意識していた基本志向は、「作る」という人間の根本的な可能性の近代的もしくは現代的あり方への哲学的反省である。この可能性のあり方を代表者は、「有用性の蝕」というタームで表現してきた。作ることの先鋭化たる科学技術化は、あらゆるものの有用化である限り、必然的に有用性の空疎化をもたらす。一切の有用化、すなわち手段化は、目的の追放を意味するからである。それは人間が依拠してきた旧来の生の地盤を脱力化するとともに、本質的に行為者である人間に、目的喪失後の空隙の補填のための新たな目的付与システムとしての虚構的な《語り》の創出を迫り、加えてこれに立脚した《自己》を造形させる。共同研究が取り上げたのは、近代化の根本動向としての目的不在のなかに生きながら、自己のさまざまなかたちの創出(ポイエーシス)に参与していった人物、文字通り詩人(ポイエーテース)、あるいは芸術家たちであった。そのことは自ずと、専門分野を異にする研究分担者・協力者の参加を求めたのであるが、代表者としても、いわゆる「哲学者」の文献研究を超えた、哲学のもう一つ別な可能性を試みる準備となったのである。

もう一点、従来の共同研究は、その成果の一部を招待学術講演、雑誌論文、著書のかたちで海外に向けても発信してきた。対象の関係から、どうしても日本語圏に留まりがちな日本思想史ないしは日本精神史に関する研究を、外国語とその文脈のなかで発信することは、当領域に関心をもつ層の拡大に寄与する。実際に当共同研究は、英語のみならず、中国語、韓国語、ドイツ語、フランス語でも発信され、それぞれの言語圏の関心を喚起してきた。それが今回のプロジェクト下でなされた招待講演、外国語論文・著書出版の背景となった。

２．研究の目的

背景となる研究が扱ってきた目的付与システムとしての神話的《語り》、もしくは「主体性」概念も含む人間観(図 B)は、究極的な根拠をもたない虚構であるにしても、それが造形される場所はあるわけで、本研究はそこを「時間」(図 D)だと考える。すなわち「時間」とは、人間が作る者・語る者として動く原本的な場であり、代表者の哲学的思考にベースを与えたマルティン・ハイデガーが「時間」を「存在の意味」だとしたのも、その趣旨に反するものではない。ただし「時間」そのものは、それ自体姿を見せないものであり、カントが時間を空間とともに感性の「形式」としたように事物の経験に絶えず付随するとはいえ、これをそれ自体として捉えることは不可能だ。だが事物が現われ経験の対象として構成されるに際して、人は不可視な時間という場所をイメージとして具象化していくことも、またたしかである(図 C)。たとえば得られた利潤を投資する資本主義の神話は、投資主体の生命を超えて「無限に進行する時間」という表象なしにはありえない。そもそも神話的《語り》一般の中軸概念である「目的」自体、未来の形体化として、時間という場所に与えられた、基本的なかたちなのである。「目的」が、世界の有用化の基礎石であることを考えれば、時間表象は、神話的《語り》の底面を形づくると考えられるだろう。本研究が捉えようとするのは、こうして生み出される時間表象の具体相とその変貌であり、それを日本の近代化過程のなかで探索し、この時期を生きた日本人が「時間」という捉えどころのない場にどのようなかたちを与えてきたのかを、明らかにしようとした。そうした知識人や芸術家たちなどが残したテクストや造形物といった具体的な表現的世界(図 A)を着手点とし、それらが作り出されるにあたって、ベースとなった神話的《語り》(図 B;その基幹となる概念がたとえば「自己」や「家族」、「国家」である)の分析を通して、時間表象(図 C)を取り出すことが目指される――これが研究遂行の基本的なイメージである。

A 表現的世界(芸術、思想 etc)
B 神話的《語り》(もしくは人間観)
C 時間表象
D 時間そのもの

当初具体的な目的として立てられたものは、①夏目漱石・自己存在の「深淵」の時間性と「小説」という語り、②柳宗悦・「協団」の理念の『白樺』個人主義からの距離、③小津安二郎・家族の肖像と映画画面の時間性、④寺山修司・演劇および映画における視座の変容の 4 項目であったが、研究遂行のなかで、変更が加えられた。また新たに溝口健二、是枝裕和などが研究対象として付け加えられたことを付記しておく。

３．研究の方法

上記目的欄に挙げた研究項目について、従来の共同研究などの成果をベースに(A)表現的世界の事象(テキストや造形的作品)を収集整理し、そのなかに含まれた(B)神話的《語り》(もしくは人間観)を析出する。さらにそれが前提としている(C)時間表象を洗い出す――これが研究方法の基本形である。たとえば小津安二郎の場合、その映画作品の観察を通して、いわゆる「小津調」と呼ばれている作風の具体的な要素(カメラのローポジション、格子状の画面構成、空間の閉鎖性、運動の断片化と反復)を整理し、そこに現われる近代化に対する懐疑的姿勢を含む人間観を分析した上で、その前提となっている時間イメージ(滞留する時間)を取り出した。作業に際しては、他の作家との比較も利用した(小津の場合、溝口健二や成瀬巳喜男)。

こうした基本方法をもって得られた成果は、国内の学会もしくは研究会、さらに海外における人的ネットワークを利用した講演において発表し、その反響をフィードバックして論文化・著作化を行なった。ただし 2020 年からはコロナウィルス感染拡大の影響で海外講演はできなくなり、オンライン・ミーティングを利用したことを付記しておく。

４．研究成果

研究成果としてまず挙げるのは、単著著作として 2020 年に上梓した『時間のかたち』(堀之内出版、全 246 頁)である。これは申請時に具体的な目標として掲げていたもので、内容的にも以下の章名が示すように、上記 4 項目を含んでいる;序章《時間》のかたち、第一章「寺山修司《書を捨てよ町へ出よう》・映画における音楽の機能」、第二章「小津安二郎の時空表象」、第三章「是枝裕和《歩いても歩いても》・時間の淀み」、第四章「可能性としての「用即美」・ものがある場所」、第五章「夏目漱石『道草』が書かれた場所」。なお第三章は上でも記したように、研究遂行上後から付け加わったテーマを扱っている。

この著作においては、5 人の芸術家もしくは思想家の残したものを手掛かりに時間表象を追跡してみたわけだが、とくに序章が宣言しているように、いわゆる「哲学者」のテキストの解釈に終始しがちな哲学の通常の論文著作とはちがうスタイルの思考とその表現を意識的に提出したものとなっている。そういう意味でも本書は、哲学の世界に独自なかたちのものを投じえたと自負するものである。

このほかドイツ、フランス、台湾、韓国で招待学術講演を行うとともに、日本語論文 6(内 1 は 9 月出版予定)、ドイツ語の論文 2・著書(共著)1、中国語著書(共著)1 が本研究の成果としてカウントできる。

研究期間の後半 2 年間は、寺山修司に焦点を絞り、関心をもつ研究者に呼びかけて、論文集の出版を目標に研究会を重ねた。現在再校の段階に入っており、未公刊であるが成果の一部として挙げ、その内容を以下に記しておく((　)内は執筆者)。第一章「虚構が「真実」になるとき・密室劇《阿片戦争》」(伊藤　徹)、第二章「居場所としての言語・寺山修司の自分語と詩的表現」(澤田美恵子)、第三章「機械仕掛けの巫女殺し・「政治の季節」のテレビドキュメンタリーをめぐって」(青山太郎)、第四章「寺山修司の「幸福」の政治学」(荻野　雄)、第五章「寺山修司と競馬」(檜垣立哉)、第六章「初期の天井桟敷のポスターを読む・劇との関係を中心に」(前川詩織)、第七章「小劇場運動と「肉体」・寺山修司をめぐる文化的野心とともに」(若林雅哉)、第八章「ナンセンスの時代と寺山修司」(平芳幸浩)。なお論集のタイトルは、『寺山修司の遺産・21 世紀のいま読み直す』、編者は、代表者と檜垣立哉の二名、堀之内出版から近く上梓の予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 Toru Ito	４．巻 1
２．論文標題 Zeit-Raum-Vorstellung in den Filmen von Ozu Yasujiro	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Working Papers des Japan-Zentrums der LMU Muenchen	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊藤　徹	４．巻 1
２．論文標題 場所としての器	５．発行年 2020年
３．雑誌名 文化の基層としての食	６．最初と最後の頁 45-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Toru Ito	４．巻 5
２．論文標題 Der Esstisch in den Filmen von Ozu Yasujiro	５．発行年 2018年
３．雑誌名 社会芸術学会	６．最初と最後の頁 9-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊藤　徹	４．巻 0
２．論文標題 溝口健二との対比における小津安二郎の空間表象	５．発行年 2018年
３．雑誌名 空間感覚の変容	６．最初と最後の頁 7-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 伊藤　徹	4．巻 9
2．論文標題 思想表現としての随筆の可能性について	5．発行年 2022年
3．雑誌名 社藝堂	6．最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 伊藤　徹	4．巻 10
2．論文標題 是枝裕和・傷ついた家族たち	5．発行年 2023年
3．雑誌名 社藝堂	6．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 伊藤　徹	4．巻 64
2．論文標題 美的経験の変容と倫理の別なかたち	5．発行年 2018年
3．雑誌名 倫理学年報	6．最初と最後の頁 19-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊藤　徹	4．巻 10
2．論文標題 寺山修司《書を捨てよ、町へ出よう》・映画における音楽の機能	5．発行年 2017年
3．雑誌名 京都工芸繊維大学 学術報告書	6．最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　6件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 伊藤徹
２．発表標題 「寺山修司・密室劇の試み・《阿片戦争》の場合」
３．学会等名 社会芸術学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊藤　徹
２．発表標題 空間としての器
３．学会等名 社会芸術学会・国際シンポジウム《文化の基層としての食》（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Toru Ito
２．発表標題 Ueber die kleinen Geschichten in den Filmwerken von Kore-eda Hirokazu
３．学会等名 Regensburg Universitaet（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊藤　徹
２．発表標題 柳宗悦　民芸思想のモダニティー
３．学会等名 世界・地域及多元当代視野化下的台湾藝術史2019重建台湾藝術史学術検討会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊藤　徹
２．発表標題 Zeit-Raum-Vorstellung　in den Filmen von Ozu Yasujiro
３．学会等名 Universiaet Muenchen（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊藤　徹
２．発表標題 日常に潜む闇・是枝裕和《歩いても歩いても》
３．学会等名 Universite Jean Moulin Lyon III（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊藤　徹
２．発表標題 Ozu Yasujiro und die Moderne
３．学会等名 Kolloquium Japan und die Wiener Moderne（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊藤　徹
２．発表標題 美的経験の変容と倫理の別なかたち
３．学会等名 日本倫理学会（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

1．著者名 伊藤 徹	4．発行年 2020年
2．出版社 堀之内出版	5．総ページ数 246
3．書名 《時間》のかたち	

1．著者名 伊藤 徹ほか	4．発行年 2020年
2．出版社 国立台湾美術館、芸術家出版	5．総ページ数 300
3．書名 世界、東亜及多重的現代視野・台湾芸術史進路	

1．著者名 Toru Ito et al.	4．発行年 2020年
2．出版社 IUDICIUM-Verlag	5．総ページ数 560
3．書名 Film Bild Emotion	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 国際学術工作研究会「食・文化の基底」	開催年 2018年～2018年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関